

 労協連だより

古村 伸宏

3.11から1年。我々が生きる社会は、誰が何のために築き上げてきたものなのか。そもそも社会とは何か、の自問が繰り返されてきた。しかし、時を重ねるごとに、その問いへの実感ある解答が共有されてきただろうか。社会とは、人が他者と共に、豊かに幸福感を持ちながら働き・暮らし・生きるための場であり、システムだとしたら、この1年は社会が崩れていることを実感し続ける日々だったといえる。しかし、本物の社会を取り戻すための営みは、我先に沈む船から逃げんとする営みにかき消されてしまうようだ。ますます孤立と分断の様相が色濃くなり、財政と社会保障の危機は、さらに分断と対立を先鋭化させる方向へと、事態を引きずり込んでいくようだ。いや、それは自然の現象ではなく、明らかに意図的にどさくさにまぎれ、事を進める勢力の存在によるものだ。

FEC自給コミュニティの創造を目指した今年度からの実践は、各地で種が蒔かれ、芽吹きを春を迎えようとしているが、実が成り花が咲くには、まだ時間を要する。そんな時期に開かれた「清掃コンテスト」「子育てフォーラム」「ケアワーカー集会」は、協同労働の真髄を示すものとなった。そして、協同労働だからこそその可能性を、参加者の多くが手ごたえとしてつかんだのではないだろうか。特に、子育て集会、ケアワーカー集会には、外部の参加者が多数訪れ、明らかに連帯とネットワークの時代を予兆

させた。その要にある協同労働の真髄とは、異なる分野の共通する専門性の土台=人間性が磨かれ、結びつきと連帯感によってその人間性は輝きを増し、本物の専門性を育んでいくということだろう。それを私は、「ケアの人間発達」「社会創造のケア」と呼ぶものとして、協同労働とケアを全面的にクロスさせた定義づけ、そして実践課題を示す必要性を強く感じる。

同時にそのことは、「働く」ことの意味や、そもそも「働く」という営みを「ケア」として捉えた時、「暮らす」こと、「生きる」ことの意味と価値を深める「仕事」とは何か、を明らかにしてくれるように思う。それが、我々の「仕事おこし」の本質なのではないか。今、多くの組合員の手ごたえとして、「働く」と「仕事」に対する、根本的な理解の深まりが始まっているように思う。それ故、FECの取り組みが短期間に共感され、実践が始まり、実感が生まれているのだと思う。そして、狭い職場や組織の垣根を超え、地域や社会の中で「結びつき」を紡ぎ始めたように思う。

だからこそ、これを「仕事」として広げることが、最も重い使命として再認識されなければならない。仕事を増やし仕事をおこす協同労働運動だからこそ、この到達点を迎えている。働く場があること、そこでの働きが自分と社会を豊かにすると理解できた時に、人は変わり社会は進歩する。震災復興の本格化を期したい。